

葉

泥の中の花

頭の巻

七月といえばお盆、お盆といえば蓮の花。蓮の花は花の中でも決して豪華なものではなく、むしろ清楚そのものです。それが仏教で特に尊ばれるのは、灼熱の国インドでは、水浴が無上の想いであり、その水中に咲く花の中でも、蓮華が花の王とされてゐるからです。また仏像にしても、その殆どが蓮の葉の上に安置されているのも、事実インドの蓮の葉には、人が乗れるくらい大きなものがあるからです。蓮には花と実が一緒に出来ます。これを仏教では因果同時、因果不一を現わすものと教え、更に蓮華が岡の上にも清い水の中に咲きず、たゞ泥沼の中にのみ、しかも泥にも染まらずに咲くことを、人もまた渦惡の世の中にあって、しかも世間の悪にも染まらずに生きることと教えます。聖徳太子は「世間虚偽・唯仏是真」と申されました。虚・不実の世の中で、仏法のみが眞実であるならば、その仏法によつて生きること、あたかも蓮華の如きにありたいのです。そして蓮華のうてなにある仏像も、単なる偶像でなく、私達の理想像でありますのです。

一鷺 峰——7月号——目 次——
第2卷・第7号・通巻13号

巻頭の言葉・泥の中の花	1
悲願の一燈	日高白象 3
我れ激流の中の	山田英美 18
笛舟とならん	
蘭盆の起源と意義	藤原成憲 26
我が出家の動機	私田吉弘 37
孝道に生きぬく者	
叢書説明	54
読者の声	55
お願い	57
暑中見舞	58
編集後記	66

表紙題字 身延山法主藤井日静院下

表紙写真 イント身延山へ渡る身延山金剛の駅尊像

表紙印刷 大阪東洋印刷社々長 藤原秀憲氏寄進

カット 身延山みのぶ教報編集部提供

談 美 仰 信

灯 一 の 頑 悲

象 白 高 日



これは、今年八十六才になる一老婆から、文字通り「腋脇をしぼった汗と油の結晶」である二十万円の大金が、突如、鷲峰会の布教資金として寄進された一通の手紙と、一個の小包に関する物語である。

1

身延山では六月十五日から十七日までの三日間、身延山開闢大法要がいとなまれました。

この大法要是、日蓮聖人が建長五年四月二十八日、三十二才にして故郷房州の清澄山頂、立教開宗を宣言して以来二十年間、鎌倉街頭、幕府と天下を相手に展開して來

た獅子奮迅の折伏の矛をおさめて、文永十一年六月十七日、五十三才にして白雲深く身延山中に分け入られ、爾來、西谷の御草庵における、九ヶ年間の懺悔懲罰の御生活に入られた御聖日を記念するものでした。

この三日間、身延山大学、高校は一齊に休校。学生は全員、大法要に奉仕していました。

その初日の十五日、私にあてた一通の手紙と、一個の書留小包が配達されました。差出人は、大阪の赤阪日孝さんというお方でした。

赤阪さんのお名前は、鶯峰誌愛読の誌友の一人で、毎月一冊も購読されている賛助会員であり、「読後の所感」として、宗門の沈退と、創価学会の跋扈を嘆いては、時折、投書して来られることで存じ上げては

いました。然し、たゞそれだけのことで、私をはじめ鶯峰会の学生たちも、誰一人として面識すらなく、

—— 一体どういう御家庭の、どういうお方であるのか ——

—— お年は、いくつになられるのか ——
—— といったようなことも、実のところ、皆

目、見当もつかないようなことでした。

「一体これは何だろう？」
小包を前にして、私は、いぶかしく思いました。

たまたま私の部屋（本山内の私の個室）に、大學三年の小林白峰君をはじめ数名の鶯峰会の学生が集って、鶯峰の事務をとっていました。

「殿間のお墓子ですヨ」
と、一人の学生が申しました。

私は、まず手紙の方から封を切ってみま

行きました。

それには、次のように書かれていました。

した。本当に何気ない気持で封を切ったのです。

ところが一読して、たゞことならぬものを感じました。目の前におかれている普

通のダンボールの小包一個、その中には大

へんなものが秘められているようでした。

「おい皆、ここに集まってくれ」

学生たちは、

「矢張り、お菓子だろうナ」

と、うれしそうに小包の廻りに集りました。

「正坐しろ。この小包の中には、重大なものが入っているよ。だ。まず手紙から読んでみる」

学生たちは奇異な思いで正坐しました。

私は便箋三枚の手紙を、静かに読み上げて

合掌

日高お上人様

初夏新緑の折柄、祝賀会益々御隆昌の段、よろこばしき極みと存じます。

先般は、誠に結構なる御渡印のお駕
迎様の御写真を御恵送頂きました。誠
に有難く、厚く御礼申上ます。長らく
家宝として保存いたす考えで居ります
御礼状が大へん遅れまして相すみませ
ん。昨日お送りいたしました品々、どう
か御納め下さいませ。

私の日常は、日々勤めの多忙さなど
りまぎれ、夜は仏前に坐って蠟細工に

夢中となつて居ります。

燈明に流るゝ蠟を手にうけて

夜ごと作りぬ み仏のかけ

と、お題目を唱えつゝ、意の向うま

ま、指の動くまゝに、蠟細工が出来上
ります。中には仏様、菩薩様、御祖師

様、龍(登り龍、下り龍)、時には御
地蔵様も御座います。粘土細工さえ一

度もしたことのない私には、こういう
ことの出来るのが不思議でなりません。

今年の一月元旦には、仏前の燈明が
ら流れ出た蠟が、自然に三十センチも
ある、はつきりとした龍の姿になつて
しまひました。

あまりのうれしさで、あちらこちら

持つて歩く中、つい手落しまして、半
身ノチャメチャになり、誠に惜しいこ
とをいたしました。

お送りしましたのは、ごく最近のも
ので、結構な有難い身延山の御靈場へ
お納め頂きますれば、本懐この上も御
座いません。どうぞよろしく御願い申
上ます。

金子は、鷲峰会の伝道費に御使用下
さいませ。これが政治の運動費でした
から問題でもありますようが、その点、
誰にも咎められることも御座いません
どうぞ御遠慮なく。。。。。

この八十六才の老婆の腰腕から參み
出た汗と油の結晶ですから、法悦にひ
たりつゝ感謝と報恩の気持ちで、お送
りいたしました。

一刻一刻と迫り来る死の旅路に、少しでも身軽になつて旅立ちたいと存じますから……。

今日も知人が、小児マヒの子をかゝえて、涙ながらの言葉には、

「人の弱点をつけ込んで、創価学会や靈友会の人たちが、それはくさながらイザリの足が、すぐにでも立つかのようだ、すすめ方をするので、どうしてよいか迷ってしまう」

といふことでした。

私には、この人たちに、こういうあわれな人たちに、満足を与える言葉を知らないのが残念でなりません。

どうか、かかる人たちに満足いけるよう、わかり易く教えを説いておげて下さい。御願い申上ます。

毎月一部御送付の雑誌、一部は図書館へ廻わして居ります。当校は女子高校生が三千人近く居りますので、他の方々へも施本したいと思ひますから、毎月五部ずつ御送本下さいます。誌料は後日御送金いたします。

梅雨の折柄、どうぞ御法体おいたい下さいませ。末筆ながら仏子の皆々様へも、よろしく御鶴声のほどを。

昭和三十九年六月十三日

日 孝

日高お上人様

3

居並ぶ学生は、一同深い感動につゝまれました。鷲峰賛助会員赤阪日孝さんは、何と八十六才のおばあさんだったのです。

— 八十六才のおばあさんまでが、私達の
鷲峰運動を贅助してくれてゐる。しかも毎
月一冊も購読され、一冊は学校の図書館に
寄贈され、更に今後、毎月五冊ずつ取って
は、知人をはじめ有縁の人々にも施本され
るという —

何と尊い志しでしよう。私達の父母にも
勝る志です。いな年令からすれば、私達
の祖父母にも等しき赤阪さんの、孫のよう
な私達に対する慈愛あふれる志でして。誰
が感動なしにおられましよう。

鷲峰会としては、毎年三千円志納される
鷲峰贅助会になられた方々には、お礼をか
ねて、鷲峰表紙のインド舞鷲山へ送る身延
山金剛の御尊像の写真を、四つ切りに引き
のばしては、一葉ずつ記念として贈つてい
るのであるが、赤阪さんも贅助会員として、

この写真を贈られたことを心から喜び、さ
っそくお手紙をしたためられて、
「この写真は、末長く家宝として保存する
考え方です」

今まで、お札を述べられた後、毎日の昼
間の勤務の疲れもいとわず、夜ごと御宝前
に端坐され、お證明より流れ来る蠟を
手にうけて、曾ってネンド細工さえされた
こともないといふのに、お題目を唱えなが
ら、心の赴くまゝ、手の動くまゝ、不思議
にも次々に造られて行く仏像等の蠟細工を
靈山身延の聖地に納めるよう依頼されたの
でした。

今、学生の目の前におかれてゐる此の小
包こそ、その蠟細工の包みであつたのです。

— お菓子かな —

— お菓子だよ —

と言つていた学生も、この由を知ると、

さすがに恥かしげでした。

小林君が、小包の紐をほどきました。そして中より真綿につつまれた品々を、一つ

一つ大切に取り出しました。

そして真綿を静かに開いてみれば、果して丹誠された蠟製の仏像や、日蓮大聖人の御尊像、或は龍神様等々のお姿が、次々とあらわれて来ました。

それは専門的な芸術作品ではないにしても、悉く素人ばなれした神氣迫るものばかりでした。八十六才の赤阪さんが、夜ごとお題目を唱えつゝ作られた信仰の真心が、大小一つ一つの仏像の上に輝いていました。学生たちは、その一つ一つを手の上におし戴いておがみました。それは作品の評価ではなく、もはや信仰の真心に感うたれる

ばかりでした。

次に小包の中から、大きな封筒が一つ出て来ました。中には一千枚の写真が入っていました。

その中の三枚は、赤阪さんが自宅の御宝前で、蠟細工に熱中されている写真であり十四枚は出来上がって陳列された蠟細工作品の写真でした。どれもこれも仏像の類ばかりでした。

そして後の三枚は、赤阪さんが校庭で制服を着た女子高校生に囲まれたものと、料理教室で白いカツボウ着をつけた女子学生に囲まれている写真、そしてもう一枚は、教壇に立って黒板を背に、お料理を講義されている姿でした。

お手紙によれば、

「当校には女子高校生が三千人近くも居り

ます」

ということでしたが、実は赤阪さんは女子高校の料理の先生であったのです。
発送台帳の住所録には「明淨学院内」とあります。明淨学院とは三千名近くもあるが、明淨学院とは三千名近くもいる女子高校だったのです。

はじめてうかごとの出来た赤阪さんの生活の一端、写真によつてうかごとことの出来た悲母のような慈顔、その膝下に喜々としてつどう可憐な女子高校生の顔、顔・・・・そして御宝前で蠟細工をされている赤阪さんな真剣なまなざし・・・・これだけでも、その人の人徳が彷彿としているようでした。

鷺峰会の学生は、写真を回覧しながら申しました。
「生き仏さんのような顔をされていろるね」

「顔から後光がさしているよ」「元気だなあ、八十六才にもなつて、まだ

教鞭をとつていらっしゃる」

「身延の法主さまが丁度八十六才、法主さまの元気には驚いていたが、赤阪さんは法主さま以上だ」

それにしてもお手紙の中に、

「私の日常は、日々勤めの多忙さにとりまぎれ、夜は仏前に坐つて蠟細工に夢中となつています」

とあります。が、昼間は毎日、学校で女子学生の指導に当りながら、夜はその疲れもいとわず蠟細工をさせていたのです。鷺峰会の学生は、あらためて蠟細工を、しきしげと眺めたことでした。

した。私は思わず茫然としました。

「お金だ」

一人の学生が、小包の中から桐の小箱を取り出しました。箱の上にはノン紙がはられ、

「奉納 身延山鶴峰会 日孝」

と、したためられていました。学生は、いぶかしげに箱を私に渡しました。

△何だろう？

私は蓋をとりました。中には白紙につゝ

まれたものゝ上に、一枚の短冊が乗っていました。短冊には連筆で、次の一句が書かれていきました。それはお手紙の中の一句でした。

燈明に流るゝ燭を手にうけて

夜ごと作りぬ み仏のかけ

次に箱の中の白紙を開いてみました。そこには手の切れるような一万円札がありま

こと一万円札の紙幣を、学生に見せました

学生も思わず息をのみました。そして暫し顔と顔を見あわせるばかりでした。

一人が恐る恐る申しました。

「何だか、まだ下の方に次山入っているようですよ」

△なに・・・まだ入っている？

私は急いで包みを箱から取り出してみました。それは部厚い、ずしりっとしたものでした。

赤阪さんのお手紙を最初読んだ時に感じた、その恐しいほどの予感が、今こそ現実に迫った思いでした。それは札束に違ひはありません。

「かぞえてごらん」

私は包みを小林君に手渡しました。小林君は一枚一枚丁寧にかぞえて行きました。
「日高上人二十枚あります! 二十万円です!」

それは驚きの声でした。驚いたのは小林君だけではありませんでした。私も居並ぶ学生も、悉く驚きに入る様はありませんでした。

八・二十万円の大金を、一面識もない一鶯峰読者が・しかも今年八十六才にもなられるという老女教師が・・

学生は歎ぶことも忘れ、肅然として襟を正さずにおられませんでした。私は、もう一度あらためて、赤阪さんのお手紙を、かみしめるように読み返しました。

金子は、櫻峰会の伝道費に御使用下

さいませ。これが政治的運動費でしたら、問題でもありますようが、その点誰にもとがめられることもございません。どうぞ御遠慮なく・・・。

この八十六才の老婆の腋腕から渾み出た汗と油の结晶ですから、法悦にひとりつゝ感謝と報恩の気持ちで、お送りいたしました。

一刻一刻と迫り来る死の旅路に、少しでも身軽くなつて、旅立ちたいと存じますから・・・』

このお手紙の中で、何気なく書かれていた金子(きんし)というのは、實に二十万円という大金であったのです。

それは、政治的な意味での運動費として入手したものではなく、實に八十六才にな

学生に対して、教鞭をとる職腕から、にじてあったのです。

み出た汗と油の揮散を、ししてたくわえてたくわえつもつたものであつたのでした。

通常、これほどの大金ならば、金額も明記した上、麗々しく事の次第を述べて、現金封筒か書留の手紙に同封して送金されるものでありますよう。

事実、私達も最初、お手紙を見た時は、寄進に関して、あまりにも簡単な文面であったため、これほどの大金とも思わず、それでも、

△後ほど別便で送金されるのであろう△
とばかり思っていたほどでした。

ところが予想もされない大金が、金額もあかされないまま、しかも書留の小包の中の、数々の品物の中にまじって包み込まれ

△寄附をうけた者の側が、よりいな気遣いをしないように。・・

これまで心をくばられた深い思いやりの心に、却って深く感動するばかりでした。

二十万円という大金は、老女教師の身である赤阪さんにとっても、容易ならざる大金であることは、お手紙の中にも、

「一刻一刻と迫り来る死の旅路に、少しでも身軽になって、旅立ちたいと存じます」

といわれていることによつても明白です。恐らく八十六才の残り少ない人生に、必要な最少限度のものを残して、悉く拋げた淨財であったことでしょう。

その奉納の理由の一端として、赤阪さんにお手紙の中に、次のように述べています。

「今日も知人が、小児マヒの子をかゝえて涙ながらの言葉には、

「人の弱点をつけ込んで、創価学会や

靈友会の人たちが、それは／＼さながらイザリの足が、すぐにも立つかのよ

うな、すすめ方をするので、どうして

よいから迷ってしまう」

ということでした。

私には、この人たちに、こういうあわれな人たちに、満足を与える言葉を知らないのが残念でなりません。

どうか、かゝる人たちに満足いけるよう、わかり易く教えを説いてあげて下さい。御願い申上ます。」

あゝ何という尊い悲願でしょう。可憐な

女子高生にとりかこまれた悲母観音のような老女教師赤阪さんの心中には、おわれな一般民衆、苦しみ迷う人々をも、正法によって導かんとする悲願にもえ、老いの身の、かけがえもない全財産を投げ出してまで、その悲願を身延山鷲峰会の青年僧に托されたのです。

鷲峰会の学生は、年三度の春、夏、冬の休暇すら返上して各地へ街頭布教を展開し志納された淨財は悉く毎月刊行する鷲峰誌の資金としながら、ひたすら街頭布教と文書伝道に戰ってきました。その法戦は文字通り血みどろでした。乏しい資金の中、一冊でも多く、より良い雑誌を、より多くの人々の手許に送り届けようと、心血をそそいで來ました。

おかげで購読者も急増し、理解ある贊助

会員も月々増加の一途をたどり始めました

然し、一天四海皆帰妙法の大理想を仰ぎ

ながら、現実に世の宗教界を見てさえも、

創価学会の如き邪教団の発行する雑誌の、

質の内容は兎も角として物量を比較するならば、数段もの遅れのあることは肯えんぜざるを得ませんでした。

「無念！」

心は、こゝにありました。またそうであればこそ学生の努力は、むしろ悽惨なほどでもあつたのです。

それだけに、この時の思いもかけない赤阪さんの寄進、学生一同、嚴肅なる感動になりました。何時しか居並ぶ学生の両眼には、熱い涙があふれ、顎をぬらしていました。それは明るい希望と誓願に輝く涙でした。

「理事会の我々の運動は正しかったのだ。仏天は常に我々の心をくみ、我々の実践をみつめておられたのだ。赤阪さんの寄進、それがこれを証明している」

「より広く、より平易に、法華經の骨髓を説き伝えねばならない。そして久遠の本仏の心にそむく一切の宗教を是正し、すべての宗教を開会して行かねばならない」

「とり赤阪さんの悲願を体した、未来へ

の希望と誓いにあふれるものであったのでした。

同が招集されました。私は再び鷲峰会学生の全員に対して赤阪さんのお手紙を披露し二十万円の現金と、丹誠された蠟細工の説明をしました。

そして種々協議の結果、次のことが決議されました。

一、現金はさっそく鷲峰会取引銀行に預金すること。

一、明十七日夕刻、身延山西谷の祖廟において、鷲峰会学生一同、祖廟塔中の日蓮大聖人の御尊靈に対し、赤阪さんの志しを奉告。あわせて先祖の菩提を回向し更に健康と寿命長久を祈願。蠟細工は赤阪さんの希望通り、祖廟靈域内、十間四面の旧草庵跡のそばにある華堂に奉納するということ。

ちなみに華堂とは、弘安四年十一月二

十四日、十間四面の大堂落慶して、日蓮大聖人みずから身延山妙法華院久遠寺と御命名された折、その大堂建立の余材をもって、それまでの三間四面の御草庵の面影を留められたものです。

一、次に「誰にでも解りやすく法華經の真意を伝えて欲しい」という赤阪さんの悲願を体して、これを具體化するため、志納された二十万円の中から、最高級のスライド映写機を購入し、フィルムは学生みずから天然色で撮影作製、鷲峰会メライド布教をして、この布教と共に、赤阪さんの悲願を永久に伝えるということ。

一、次に赤阪さんが、鷲峰誌を一冊、余分に購入して明淨学院女子高校の図書館に寄贈し、更に毎月五部ずつ施本用を購入されるという志しに対し、鷲峰会として

明淨学院図書館に、鷺峰表紙にあるイン
ド・靈鷲山へ渡る身延山の金銅の釈尊像の
写真を全紙二倍に拡大して寄贈するとい
うこと。

阪さんの悲願は、一歩一歩達成されて行く
ことでしょう。

6

翌くれば六月十七日、この日は身延山開
闢第六九一年自の御聖日、その夕刻、鷺峰
会の学生は祖廟に集合しました。そして昨
日の決議の如く、擊鼓の法音も高らかに赤
坂さんの志しをとげ、そのまま身延町へ下
って、午後七時より晨開される学生の街頭
説法に参加、感動も新たに立正安國の大獅
子吼をしたのでした。

スライド布教の準備は、目下着手として
進められています。やがて鷺峰会学生布教
の行く所、スライドを通して八十六才の赤
坂さんのお心の光となつて行くことであ
ります。

また消ゆることなく、スライドの光を通し
て、あまねく老若男女のすべての人々の、
心の光となって行くことであります。

なお赤坂さんの短冊は、六月一日より法
燈を継承した身延山の旧蹟、波木井の醒悟
園本妙庵の床柱にかけられたことを附記し
ます。

稿をおくにあり赤坂さんの御住所をお伝
えし、読者皆様の中より温いお手紙の、赤
坂日孝（旧名りんえ）さんのもとへ届けら
れんことをお願い申上げます。

大阪市阿倍野区文ノ里三丁目
明淨学院女子高等学校内

我れ激流の中の 籠舟とならん



身延山大学一年

山田英美

日蓮大聖人が、今からおよそ七百年の昔
北海の孤島 寒山佐渡ヶ島での忍難四ヶ年
の後、四方屏風をついたてたような山々に
かこまれた、白雲深き身延山中に入られた
のは、文永十一年六月十七日、御年五十三
才の時のことでした。

その後八ヶ年、弘安四年十一月二十四日
波木井の領主南部実長公の寄進によって、
十間四面の大堂落慶し、大聖人みずから身
延山妙法華院久遠寺と命名されるまでの御
草庵は、何と三間四面、柱十二本という、
見るからにみすばらしい三昧堂であったこ
とは、庵室修復御書に、

「去る文永十一年六月十七日に、この山の
中に、木を打ち切りて、かりそめに庵室を
つくりて候いしか、ようやく四年がほど柱
朽ち、垣壁落ち候えども、直すことなくて

夜火をとほさねども、月の光にて聖教を読みまいらせ、吾れと御經を巻きまいらせ候わぬども、風おのすから吹き返しまいらせ候いしが、今年は十二の柱、四方に頭（こく）（うべ）を投げ、四方の壁は、「一そに倒れぬ」と申されておられる通り、四年ほど経つた建治三年の頃には、既に十三本の柱も朽ち四方の壁も落ち、破れた屋根からさし込む月の光で、夜は灯をつけなくとも、お經を読むことが出来、その經巻も手で巻くらなくとも、破れた壁から吹き入る風で、おのずから經巻が吹き巻くられていたような有様であったのに、それも何時までもつかず、遂に十二本の柱は大きくかたむき、四方の壁は全部、一べんに崩れ落ちてしまつたほどであったのです。

建ててから、わずか四年、乃至数年の間

に、柱も壁も朽ちて落ちるには、よほど粗末な草庵といふよりも、バラツク同然の建物であり、また鷹取山の北麓、身延川のそばの、如何に陽当たりの悪い、湿気の多い所であつたか、ということが想像されましょも大聖人は、こうしたバラツク同然の御草庵を、朽ちては継ぎ足し、倒れては立て、破れてはふさぐといつたような修理を、幾度も／＼も繰り返しながら、その中に八ヶ年もの間、打ちつゞく病苦に堪えながら御生活されたのです。

そして弘安四年の閏七月三十日、再度来襲した蒙古の大軍が、一夜の台風のためにかず、遂に十二本の柱は大きくかたむき、文永元年七月立正安國論を以って國家諫諭して以来二十年間、あらゆる法難にも屈せず、書鐘を乱打しつづけて来た、さしもの国難も去

ることにより、こゝに初めて本格的な十
間四面の寺院建立を許されたのであります。

これが身延山久遠寺の藍鵲でありますか

蓋し、この十間四面の久遠寺こそ、大聖人
六十一年の生涯の中に建てられた、始めて
にして最後の、たゞ一ヶ寺の寺院であった
のです。

思えば大聖人ほどのお方であられるなら
ば、壮大な御藍を建立しようと思えば、六
十一年の生涯の中には、幕府のある鎌倉を
はじめ各地に、何ヶ寺でも建立することが
出来たでありますよう。

伝えるところによれば、文永十一年四月
八日、第三回目の國家諫説の際、鎌倉幕府
は大聖人に對して、一千町歩の美田を寄進
し、愛染堂の別当職に任じて、蒙古調伏の
祈禱に當らしめんとされたのを、大聖人は

この申出を一蹴し、翌る五月十一日、鎌倉
をたって身延へ向われた、といわれていま
す。

何故この時、大聖人は一千町歩の別当職
を、一蹴されたのでしょうか。

また大聖人が、鎌倉街頭、逆化折伏を展
開された法戰の根拠地である松葉ヶ谷の御
草庵は、市街を眼下に、幕府を正面に見お
ろすという屈強な高台にありながら、何故
そこを寺院として建立されなかつたのでし
ょうか。

まして身延に入山されてから八ヶ年もの
間、相も變らずバラツクのような三間四面
の御草庵に御生活されて、恐らく本格的な
寺院建立を申し出られたことであろう多く
の大權越の寄進を、弘安四年の蒙古襲来と
いう大困難の去るまで、拒絶されたのでし

ようか。

若し大聖人が、末法万年にわたる広宣流布の根本道場を建立されたために、身延に入山されたのであつたならば、弘安四年を待たずして、入山後ほどなく、それにふさわしい大道場を建立されたことでしょう。

また大聖人滅後、身延山第十一世行学院日朝上人が、本院を西谷の祖廟から、中谷の現在地に移されるのを待たなくとも、大

聖人みずから既に身延在山中、少くともそうした設計図を作製しておられたことでしょう。

ところが、そうした事実は、兎の毛をついたほども、うかうかすることは出来ないのです。

そこで大聖人が、身延入山以前においても、また入山以降八ヶ年まで、この間、す。

一ヶ寺の寺院も建立されなかつたということは、再度の蒙古襲来という国難が去つた弘安四年十月、はじめて寺院建立を許されたということからふりかえってみると、それまでの大聖人の生涯中、寺院建立すら願りみることの出来ないほどの、未曾有の大國難が逼迫していた、ということに思い当るであります。

事実、大聖人は、この逼迫した未曾有の国後退という内憂外患があればこそ、これを速かに解決し、三界火宅の世の中を、三界仏界の淨土とすべく、立正安國の大運動に、文字通り心血をそそいで、ために寺院建立すら願りることは出来なかつたので

たとえば大聖人の晩年、静寂な身延在山中に坐ってさえも、蒙古襲来という大困難

を眼前にしながら、最後の機会と思われた三度目の國家譲曉も、遂に入れられず、かくなる上は、同じ久遠の本仏の仏子であるべきはずの民族と民族とが、血で血を洗らねばならないという残酷なる戦争の罪を両民族に代つて、仏天に懺悔恸哭するほかはなかつた大聖人に、どうして寺院建立などと思いもかりられるものであります。人類斗争の罪業を一身に背負う大聖人たることは、むしろバラツクの如き草庵こそふさわしいものであったのです。

然るに今日、こうした日蓮大聖人の門下の中に、新寺建立は愚か、継承した寺院の經營にさえも、日々汲々としている者が多いということは、一体どうしたことでしょう。

う、これで果して、日蓮門下といえるのでしようか。

大聖人が寺院建立すらも顧みることなく、ひたすら国難のため、人類の危機のため、身命を捨てゝ戦われた立正安國の精神は、一体どこへ行ってしまったのでしょうか。日蓮門下の中に派生して来た新興宗教を例にとってみても、彼等の信仰は、個人の欲望と、単位（寺院）組織の欲望、そしてこれを包括する教団全体の野望のほかに、一体、何があるのですか。

国家の危機・世界の危機は、七百年前の日蓮大聖人当時よりも、より深刻であることは、小学校の児童でさえも承知しているところです。

この時、世界の人類に較ぶれば、數も少い日蓮門下が、国家の危機・世界の危機、

時代の推移をよそ目に、寺院の経営に汲々としていたり、教団の発展にばかり心をくだいていてよいものでしようか。

日蓮大聖人の二陣、三陣と続く者は、寺院、教団の経営を第二義的なものとして、

大聖人がバラック草庵の中にあって生涯を捧げた立正安國運動こそ、第一義としなければならないことは言うまでもないのですが、そういう人は、今、何処にいるのですか。

立正安國を第一義とする道は、きびしくも多難な、波乱万丈の道です。この道を行く者は、たとえば大地の土に対し、爪上の土の如く、わずかな人々です。

然し、この人గなければ法華経の道は立ちません。立正安國にもとづく世界の平和は実現出来ないのであります。

今、世界の流れを、怒濤さかまく大河にたとえ、人間を 笹舟にたとえてみましよう。 笹舟は、大河の中央の激流に、乗り入れることも出来れば、岸邊のおだやかな流れに流れることも出来ます。

蓋し、大抵の 笹舟は、岸邊にひしめき、激流に乗り入れる 笹舟は、ごく稀にすぎません。

岸邊を流れる 笹舟は、成程おだやかな流れの中にあって、確かに安全であり、無事平穏の中、他の多くの 笹舟と肩をならべて淋しくもなく、あたりの風光を楽しみながら、苦しむようなこともないでしよう。

然し、一味の大海上に入りたい、と望んではいても、とかく岸邊のよどんだ流れに留まつてしまつたり、逆風に吹かれて、反対の方へ流れたり、或は岸邊につゝかゝつてしまつたり、と、必ずしも理想的な状況にはな

またたり、川の落差のある所では、ひっくりかえって沈んでしまい、遂に大海へそゝぐことは出来ないものです。

寺院経営に汲々としたり、現世安穩ばかり願う信仰、たとえば新興宗教などは、まさしく此の 笹舟の如きものです。

一方、大河の中央、怒濤さかまく激流に乗り入れた 笹舟は、他に同類の 笹舟を見かけることも稀であり、自身孤独の中、岸辺の 笹舟にくらぶれば、瞬時も安らかなことはなく、悲戦苦斗の中、無事大海に入るとの出来るものは千中無一、早くも激流にのまれてしまうであります。

然し、身はたとえ薄脣となつても、この激流の中にあればこそ、遂には一味の大海へそゝぐことが出来るのです。

この激流こそ、立正安國の道であります。

悠久の流れであります。生も悠久の流れの中におり、死もまた悠久の流れの中にあります。流れは如何に激流であろうとも、それが無上真実のものであるならば、たとえ生は短かく、死は早くとも、何ら悔ゆるところはないはずです。

「私は、激流の中の、 笹舟になりたい」

明日の命は、どうなるとも、今まで流れて来られたことに感謝して、

「何時、沈んでも悔ゆることのない悠久の真理——立正安國の道に生きる此の身でありたい」

そして激流の中に、微塵と碎けるならば「その功德は、親のため、兄弟のため、恩にさずかった学校の先生や友達のため、そして広く世の人々のために回向したい」と願うばかりです。

激流の中の筏舟には、憩う岸邊もありません。

せん。それは大聖人の生涯に、草庵らしき草庵もなかつたのと同様でありますよう。

筏舟は怒濤に翻弄されて、身もきしむような音をたてつけます。それは立正安國を祈る必死のお題目です。

お題目は、筏舟の運命と共に、たゞの一本でもよい、また一分間であつてもよいと思ひます。

「百べん唱えたから、一時間唱えたから、どうだ」

としたようなお題目は、欲望のお題目であつて、決して絶対のお題目ではないのです。

立正安國のお題目は、一瞬一瞬命をかけた本仏付屬のお題目です。自己の全生命を本仏大悲の中に、完全燃焼させたお題目で

「私は、そうしたお題目を、唯の一べんでもよい、早く唱えられるようになりたい」

大聖人は、人類の罪業を一身に背負い、民族の場に立って、

「我れ日本の大船とならん」

と宣言されました。

今の私には、大聖人のような大船となることは出来ません。せめて立正安國の激流に身をすかせた筏舟として、何時、怒濤にのまれるかも知れないままで、今日の人類の危機、國家の危機に向つて、必死の唱題をつづけるばかりです。

(おわり)

盂蘭盆の 起源とその意義



身延山大学三年

藤原成忠

1

盂蘭盆といえば、七月十三日の夕刻より十六日の朝まで四日間、先祖の精霊を迎えて、それを祭り、その冥福を祈る、仏教の行事であって、略して盆会（ぼんえ）といい、または単に盆、お盆とも称し、或は魂祭（たまつり）、精霊祭（しょうりようまつり）、盆祭（ぼんまつり）とも呼び、精霊が供養をうけて歡喜することから歓喜会（かんきえ）とも名づけられているものです。

盂蘭盆は、本来、仏教の行事でありながら、我が国の民族風習の中に深く浸透して古来、正月と共に我が国における一大節期とされ、俗に盆、正月というように、信仰の如何にかわらず、上下ともに広く行わ

れ、今日なお重要な、そしてうるわしい民族の風俗習慣として伝承し来ています。

この行事は、太陽暦の用いられる以前にあっては、もっぱら陰暦の七月に行われていましたが、今では陽暦の七月か、一月おくれの八月に行われるのが通例となり、昔の通り陰暦七月に行う所は、最早あまり見かけられないようです。

2

あると孟蘭盆というのは、梵語のウランバナ *ulambana* の音訳で、また烏藍婆拏とう字を当ててしたもので、その意味は倒懸（とうけん）というのです。倒懸というのは、倒（さかさま）に懸（うち）る、この言は誤りなり

のことについて「玄応音義」第十三には、次のように述べられています。
【孟蘭盆とは、これ言の訛（なまり）なり。正しくは烏藍婆拏とう。これを訛して倒懸という。西國の法を授するに、衆僧自恣の日に至り、盛んに供具を設けて、仏僧に奉施し、以って先亡の倒懸の苦を救う。彼の外晝に、先亡に罪あり、家また嗣を絶ち、人の神を祭り、救いを請うことなければ、則ち鬼處において倒懸の苦を受く。】
といふをもって、仏は、俗に順じて、また祭儀を設け、すなわち三宝の田中（でんちゅう）において、深く功德を起さしむ。旧に、孟盆は、これ食を貯うるの器といふ。則ち「玄応音義」第十三によれば、仏教にかかる」という意味で、さかさまにつるされているような非常な苦しみをいうのです。以外の俗信仰の中で、

「先きに亡くなつた精靈自身に犯した罪があり、また家に後継者がなく、家人が神を祭つて、先亡の精靈の減罪と救済を祈ることがなかつたならば、先亡の精靈は、そのまま鬼のすみ処に墮ちて、いわゆる倒懸の苦をうける」

という教えと、その教えにもとづく風習とがあつたため、仏教でも、この俗信仰に順じて、仏教の儀式を起し、神に対する信仰によるものでなくして、仏法僧の三宝に対する信仰によって、先亡の精靈の減罪と救済成仏を祈り、深く功德をつむことを起さしめた、というのです。

これに對して、音密の「盂蘭盆經疏」卷下には、

「盂盆は、これ西域の語なり、これを倒懸といふ。盆は、これ東夏の音なり、よつて」という。盆は、これ東夏の音なり、よつて

救器となす。若し、方俗に隨わば、まさに救倒懸盆といふべし」

といって、盂蘭と盆を別々に分つて考へ、盂蘭をもつて倒懸の意、盆をもつて衆僧に供養する飲食を盛る器の意、と訳されています。

然しこれは恐らく盂蘭盆經に、

「世の甘美を尽して以つて盆中に著く」

といつた所に依つたものでありますよう、嚴密には、盂蘭と盆とは別々に分つものではなく、「玄応音義」にいゝ通り、盂蘭盆そのものが倒懸の意であることは、原典梵語の *Alambana* が既に倒懸の意であり *Alambana* が初め鳥鷺婆等に音訛され、更に訛蘭盆と音訛された言語学的経過をみても、既に明白であります。

従つて「玄応音義」が、言尾に當つて、

「旧（旧書）に、益は、これ食を貯うるの器といふも、この言は誤りなり」と念告したのも、もつともなことでありましよう。

る

以上は盂蘭盆の語源から、その語意をたずねてみたのですが、次に

「仏教以外の俗信仰の中にある盂蘭盆の行事が、仏教の中に取り入れられてから、どのようにして行わられたか」

ということについて考えてみましょう。まず盂蘭盆經の中では、次のように述べられています。

「若し比丘、比丘尼・國王・太子・王子・大臣・宰相・三公・百官・萬民・庶人あつて、孝慈を行せば、皆まさに所生現在の父

母、過去七世の父母のために、七月十五日、仏喜歎の日、僧自恣の日ににおいて、百味の飲食を以って、盂蘭盆中に安き、十万自恣の僧に施し、乞い願うて、すなわち現在の父母をして寿命百年、病いなく、一切の苦惱の患（げん）ならしめ、乃至（ないし）七世の父母をして餓鬼の苦を離れ、天人の中に生じて、福樂きわまりなきことを得せしむべし」

これによれば、仏教の行事として取り入れられた盂蘭盆は、それまでの個人的な民間信仰から、比丘（男僧）比丘尼（尼僧）という仏教僧侶はもとより、上は國王・太子・王子・大臣・宰相・三公・文武百官をはじめとして、下は万民、庶人に至るまで等しく行らるべき広範囲な国家的信仰として拡大されており、更に、その祈りの内容も、

「先亡の精霊が、存命中に犯した罪業や、
或はその家に後継者がなく供養する者もな
いため、みずから鬼魘に赴いて倒懸の苦し
みをうけるのみならず、それがそのまま現
世に及ぼして、種々の禍いをなす」

といったような單なる恐怖的信仰脱皮し
てから、誠悔滅罪、報恩感謝という仏教精
神によって、ひたすら先祖の倒懸の苦しみ
を教い、その成仏を祈るという、報恩孝順
の仏事として昇華されています。

また報恩孝順の仏事であればこそ、先亡
の精霊の範囲も、たゞ漠然たるものでなく
過去七世にまで、明確にさかのぼっていま
す。

この過去七世の先祖というのは、七世ま
でというのではなく、七世までもさかのぼ
ることによって、それ以前の悠久の過去の
出来ましよう。

「先祖の靈に対し、百味の飲食をもって
追善供養するが如く、現在存命中の父母に

すべての先祖をも包含しているのです。

これによつて仏教における報恩孝順の精
神が、如何に徹底したものであるかと明白
となりましよう。

更に仏教では、盂蘭盆に際し、先祖の精
霊を供養するのみならず、現在存命中の父
母に対しても、孝順報恩の道として、

「寿命百年、病いなく、一切の苦惱の患な
からしめん」

と祈念するのです。

こゝに、他の如何なる宗教とも異つて、
形而上（靈と靈界）のみに偏せず、あくま
でも現世を主眼とした仏教の特色が、遺憾
なく現われていることを、うかうかことが

対しても孝養の誠を尽くし、存命中の父母につかえるが如く、先祖の靈に報恩の誠を尽くす」

といふのが、三世にわたる仏教の、盂蘭盆における本旨であったのです。

そして、この仏事が、仏教と共に我が国に伝来してより、我が國古来の祖先崇拜信仰と融合して、うるわしい民族の風俗習慣を形成しつゝ発展して來たのであります。

ところが、もともと生きた人間の、人生と社會を指導することを主眼としていた仏教は、何時しか、その本旨を失って、葬式仏教と化し、盂蘭盆の仏事も、形式に流れ、過去の精靈を供養するのみに留まり、それも過去七世にまでさかのぼることは愚か、現在存命中の父母に対して、報恩感謝の誠を尽くすということに至っては、遺憾

ながら全く忘れ去られてしまつてゐるような状態であります。

仏教の衰退をなげき、真剣に仏教の復興興隆を願うならば、たとえば此の蘭盆の一仏事にしても、本来の在り方に帰らしめねばなりません。その責任は、現在の私たちにあるのです。

今年も、また盂蘭盆がやって来ました。今年の盂蘭盆こそは、例年のように、單なる風習としてやりすごすことなく、先亡七世の先祖の精靈に心から供養して、倒懸の苦しみを教い、その成仏を祈ると共に、存命の父母に対して孝順の誠を尽くし、更に「寿命百年、病いなく、一切の苦惱のないよう」

と仏天に祈りを捧げたいものであります。

次に、仏教の盂蘭盆における特色として「七月十五日、百味の飲食をもつて、十万自恣の僧に供養し、乞い願って現当一世の至孝の誠を尽す」

といふことが挙げられます。

このことは、仏教以前の先亡供養がたゞ単に形而上の神々に祈願することに依つていたのに對して、あくまでも人間の菩薩行の実践を中心としていることを明かにしているものです。

ここに自恣の僧というのは、身口意の三業にわたつて反省、懲悔している修行僧のことです。

従つて自省自戒していない僧侶は、盂蘭盆の儀式を行う資格も、また信徒の供養をうける資格もない、といふことが出来まし

よう。これは盂蘭盆に限らず、すべての法要儀式についても、同様に言ひ得ることではないでしょうか。今日、自省、自戒もなく、たゞ袈裟、衣をまとつて、口さきばかり読経をことゝする僧侶の多いことは、そのまま仏教の墮落腐敗を象徴する以外、何ものでもありますまい。

法華教々典が、教菩薩法、仏所護念ともわれているように、仏教は神仏に祈ると共に、みずから菩薩行の実践が主眼として強調されています。

如何に神仏に祈つても、みずからの菩薩行がなかつたならば、減罪も成仏も遠ざけることは出来ないので、「菩薩行によってのみ、倒懸の苦から解脱し、成仏することが出来る」

こゝに、菩薩行を主眼とするところから

仏教の盂蘭盆では、神々に供養することよりも、みずから厳しく菩薩行を実践し抜かんとして、更に自省自戒する自恣の僧に対して、供養する意義が起っているのです。

5

次に、盂蘭盆は七月十五日といわれ、後世次第に、その前後の三日間、或は四日間にわたって行われるようになって来ていましたが、もともと盂蘭盆が七月十五日と決められたのは、お釈迦さまの在世中にさかのぼることです。

御存知のようにインドでは、年に一度、屋外にも出られないような、ひどい雨期が三ヶ月もつづきます。

そこで、行脚布教をこととしていたお釈迦さまはじめ多くの仏弟子たちは、この雨

期の四月十五日より七月十五日までの三ヶ月間、行脚布教を一切中止して、たとえばマガダ国の首都王舍城の郊外にある竹林精舎や、コーサラ国の首都舍衛城の郊外にある祇園精舎などという一定の寺院に留まつて、雨期のすぎるのを待ち、この間、日頃、聴聞することの出来ないお釈迦さまの組織立った詩義をうけ、これにもとづいて、各自に深い思索と禅定に入っていたのです。

そして雨期もすぎ、空もカラリッと晴れ渡る七月十六日、来年の雨期に再びお釈迦さまのもとへ落ちあうことを約して仏弟子たちが、それぞれ定められたインド各地への、行脚布教の任地へと旅立つに際して、その前日の七月十五日、雨期三ヶ月間にわたり各自の、身口意三業上における、反省すべきことを反省し、一人一人衆座の前に

立って懺悔すべきことを懺悔し、また自分
気付かなかつたことは、人々より指摘し
てもらひ、一層菩薩行に精進することを誓
いあつたのです。

これは毎年のならわしであったのですが
かの有名な、釈迦十大弟子の中でも、神通
第一とうたわれた目連尊者が、この雨期の
三ヶ月の修行の中、
へ亡くなられた母の精霊が、靈界の何処に
あるか」と、神通力をもつて尋ねたところ
餓鬼道に落ちており、神通力で救おうとす
ればするほど、却つて母の飢餓の苦しみを
ますばかりであったことを、懺悔告白した
のが、この七月十五日であったのです。

この時、お釈迦さまは、目連尊者が自分
の母ばかりを救おうとしたエゴイズムを示
すし、更に成仏は、神通力によるものでな

く、自他不二の菩薩行によるべきものであ
る、ということを教えられています。

こうして目連尊者の物語は、盂蘭盆と切
つても切れないものとなり、やがて目連尊

者の故事によって、盂蘭盆が起つて来たか
のように思われるに至りましたが、実は、
もともと七月十五日が雨期三ヶ月後におり
る総仕上げの自恣（反省・懺悔）の日であ
り、これにヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリ
盂蘭盆の仏事
が起り、その中に代表的なものとして目連
尊者の故事が起つたと、みるべきであります
しょう。

要するに盂蘭盆の七月十五日は、自恣の
日として、各人が同行同僚の衆の前に立つ
て、みずから反省・懺悔し、また自分に気
付かない点は、人々から示摘してもらつて
までも、一層菩薩行へ精進することを誓い

あつた、ということに大いなる意義がある
と思ひます。

今日では、既に盂蘭盆における、そうした自己反省、自己懲悔の精神は愚か、形式すらも失われてしまっています。

私達は、うるわしい民族の風俗となつた

今日の、盂蘭盆の行事の中から、再びその本来の精神をよび起し、お祝迦さま在世當時の如き、盂蘭盆の在り方を復活しなればなりません。

とか、或は
令顛倒衆生 頭倒の衆生をして
と述べられていますが、倒懸にしても願倒にしても、生死の如何にかかわらず、本仏釈尊の仏知見にそむく者の姿にはなりません。

仏陀の知見は、久遠の本仏釈尊を、我等の本尊として仰ぎ、主とも親とも師とも慕って、その功德聚である法華經を如説に修行する菩薩行によって、おのずから修証されて行くのであります。

煩雜をわみなき人生において、しかも常に仏陀釈尊を仰ぎ、わけても七月十五日の盂蘭盆を迎えては、過去七生の先祖のみならず、それ以前にもさかのぼる無量の先祖の靈に対して、心から追善の誠を尽し、更に存命中の父母に対しても孝順の誠を尽し

て寿命の長久、無事無災を祈り、あわせて恩恵にあずかっている無量無邊の人々に感謝すると共に、みずから菩薩行の至らなさを反省、懺悔する時、盂蘭盆の本来の意義がはじめて達成されるであります。

如何に親は、親たらすとも、この親なく

ては、今生におりる自己の生命はありません。

先祖の靈、如何に罪業の因縁を深く残す

とも、この先祖なくして、自己の生命は、

此の世に出現することは出来なかつたので
す。

また此の世の中だ、如何に敵が多くても
この敵なくして、今日の自己の存在はあり
得ません。

このように考える時、自己の只今の存在

は、実は、こうした人々によつて形成され

てゐることを知り、自己の生命を尊ぶ以上
こうした人々にも、有縁無縁の一切の人々
にも、感謝の心は、おのずから生じて、せ
めて盂蘭盆に際して、報恩供養することと
なるのです。

則ち盂蘭盆の供養は、自分の血縁のみに
限らず、有縁無縁の一切の人々にも、更に
は禽獸にも及ぶ、という広範囲のものであ
ると知るべきであります。

(おわり)

我が出家の動機

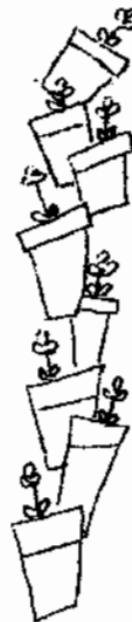
孝道に生きぬく者

最終回

身延山大学三年

和田吉弘

10



私が大阪府下の布施第二中学に入学したのは、昭和三十一年の春のことでした。小学校の時もそうでしたが、中学校に入つても、私の身長は、上級生を抜いて全校唯一でした。

非常に目立った体格であったためでもありますより、入学早々、バスケット・ボール・クラブに入るようすすめられました。これには父母も、最初の中には、あまり感心しないようでしたが、私の熱心な願いに

負けて、入部を許してくれました。

ところが、一旦入部してみると、バスケット。ボールの練習は、お寺における父の厳格な教育とは別に、また苦しいものでした。

練習は放課後でしたが、夏は三時間、冬は二時間、休みなく続けられました。夏の強烈な直射日光の下で真黒になり、冬は寒風肌さすため手足にアカギレを切らし、毎日先輩から尻をたたかれ、大声でどなりつけられ、汗を流し、足腰も立たなくなるほど練習に励みました。

父母亲を説き伏せてまで入ったバスケットボール。クラブであればこそ、父母亲にも安心してもらいたい一心で、練習には、それこそ無我夢中でした。

おかげで腕は、めきめき上達しました。

上達すればするほどバスケット。ボールが三度の飯よりも好きになり、中学二年生になると同時に、五人のレギュラーの中に加えられ、三年生の時には、キヤブテンとして試合にも臨み、数多くの好成績をおさめて大阪府民大会では三位までくいこむことが出来ました。これは私の中学校では、曾つてない成績であったのです。

ところが、その年の夏も過ぎた頃より、バスケット。ボールもさることながら、高校入試が当面の問題として、おこいかぶさつてきました。

毎晩のように試験勉強が、十一時すぎまでも続きました。さすがに父も、私が朝の動経を休むことがあるても、大目にみてくれていました。

父母亲の慈愛と、家族そろっての応援で、

無事入学することが出来たのは、同じ進学

になりました。

区の中でも、一、二とくわれた府立布施高校でした。

11

布施高校には、中学時代の先輩が、矢張りバスケット・ボール・クラブで活躍していました。またクラブ顧問の先生も、私を知っていました。そうした関係から、入試合格の発表のあった翌日から、入学式も待たず、早速クラブの練習に通いました。

当時、私の身長は一七九センチ、チーム

随一でした。この年、布施高には、各中学の有名選手が集っていましたので、布施高チームのレベルは、大阪府下でも急に上昇し、私は一年生の五月に開かれた府民大会を始めとして、次々に試合に出場するよう

然し高校の練習は、中学時代にくらべれば、くらべものにならないほど烈しいものでした。家に帰るのは、大抵、夜の七時をすぎており、心身ともにクタクタになって、家の敷居をまたいだ途端、その場にヘナヘナと坐りこんでしまうような毎日でした。

その上、勉強は高度になり、予習、復習をしなければ、皆について行くことが出来ず、烈しい運動をした後の勉強は、大へん苦しいものでした。

苦しい勉強と運動、然し、その苦しさを克服して、これを両立することが出来たのも、若さと、人並み以上に恵まれた丈夫な体によるものでした。

高校一年のバスケット・ボール大会では、大阪府下でも三位に入ることが出来、二年生になると同時に、中学時代もそうであったように、チームのレギュラーに加わりました。

もはや私たちのチームに勝つものは、府下でも、一、二を数えるだけとなり、常に府下一位・三位を守り続けました。

そして私が高校三年生になつても、その座を失うことはなく、試合のたびに、常に優勝戦線に顔を出し、優勝候補にあげられていきました。

こうした華々しさに加わえて、バスケット・ボールの技術が、ますます上達して行きました。

バスケット・ボールで名を挙げたい」という野望が、次第に頭をもちあげて来ました。

練習は、どんなに苦しく、つらくとも、

その後には楽しい試合があり、試合の度ごとに優勝戦線まで勝ち抜いて行き、ます

ますバスケットボールに対する意欲は強いものとなり、明けても暮れてもバスケット

ボール、これなくして人生はないよう、バスケット・ボールが好きで好きでたまりませんでした。

それは高校三年の六月のことでした。大

阪中央体育館で開かれた韓国親善大会に、大阪府代表の一人に選ばれ、数千人の大観

衆の前で、華々しい試合をしたこともありました。

バスケット・ボールで名を挙げたい

といふ野望が、次第に頭をもちあげて来

でおわらな年です。私は、自分個人の志望としては、

これまで上達したバスケット・ボールの技術を、より一層いかすためにも、また飯よりも好きな道であるだけに、出来ればバスケット・ボールの有名校に入りたい

と思いました。同時に、その反面には人お寺の長男として生れ、長男として育てられたものとして、お寺をつがねばならない。そのためには立正大学とか身延山大学といった宗門大学へ入らねばならないので

はないか。

といったような宿命的な道も考えねばなりませんでした。前者は希望であり、後者は義務でした。然し当時の私は、個人の立場で、前むきに進むべきか、お寺の立場で、後むきに進むべきか、

といふ二者択一の場に立って、そのいづれとも決められないまま、ともかくも人に負けないように、試験勉強と、バスケット・ボールの練習に励んでいました。

というのは、若しが、

「バスケット・ボールの道へ進む」

ということを、父母に語れば、一言のもとに反対されることとは、目に見て判つていたからです。

また一方、私が、

「宗門大学へ進みたい」

と言えば、父母は、どれほど喜んだこと

でしよう。

それが手に取るよう判断していただけになりました。前者は希望であり、後者は義務でした。然し当時の私は、一般大学志望のこととは、口に出すことさえ

恐れられました。

曾て一度も、父母に対しても話を言った

こともなければ、かくことをしたこともなかつただけに、私自身、ひそかに一般大学志望を秘めていること自体、非常な苦痛でした。苦痛は日々苦悩となつて来ました。然し、苦悩がつのればつのるほど、まるでとりつかれたようにバスケット・ボールの練習に熱中しました。コートに立ち、ボールを握っている私には、考え方を何ものもありませんでした。ボールを追い、ボールと一緒にとなつたスポーツ・マンとしての私があるだけでした。

然し、練習が終つて帰途につく時、再び苦悩のおおいかぶさつて来るのを、どうするとも出来ませんでした。

何時しか朝の動経も、お寺の手伝いも、試験勉強とクラブの練習を理由にして、事あるごとに遠ざかって行きました。

これには、父母の了解を得ていたのですが、然し、お寺に生れ、お寺に育ち、そしてなお、お寺で暮していふ以上、さすがにうしろめたさを禁することは出来ませんでした。

また、もの心もつかない頃、御宝前に坐つて、「私の小便たれを直して下さい」とおがんでいたようだ。また小学校から中学校にかけて

「勉強も出来ますように……」
と、おがんでいたように、高校になつても、試合あるごとに、

「どうか立派なブレイが出来ますように」と、おがんでいたにもかかわらず、一旦、バスケット・ボールで身を立てるべく

日蓮宗とは何の関係もない一般大学への志

望を、心ひそかに持つようになつてからはなおさらのこと、たとえ父と共に勧業に出なくとも、御宝前の御挨拶として、朝夕欠かさず香を立てゝお題目を三邊唱えていたのですが、そのたびごとに、風が体の中を吹き抜けるような空しさを、感ぜざるを得ませんでした。

今まで身近かに感じていた本堂須弥壇の三宝さまが、スワーと遠くへ退いてしまわれるようであり、私に向って何時もほゝえんでおられた日蓮大聖人のお顔までが、何時しか、こわいように感ぜられ始めていました。

の猛練習をしていた或る日のこと、布施高校出身のクラブの先輩から

「東京の芝浦工業大学で、選手をスカウトしているから、行く気はないか」

と、すすめられました。これは電撃的なショックでした。たしかに芝浦工大は魅力的です。然し、それよりも二者択一の道を決める時が、予想していた時間を越えて、急激に迫ったのです。

私は、芝浦工大の選手スカウトの話しが乗って喜ぶよりも、むしろ宗門大学へ進むべきか、一般大学へ進むべきかという、生涯の方針を決定しなければならない瀬戸際に立たされたのです。今までの苦惱と焦慮は、ギリギリの頂点に達した感がありました。

で、先輩に返事も出来ないでいる中、今度は大阪の関西学院大学と関西大学からも勧誘をうけ、その返事にも困って、くすぐずする中、運動技術をテストするセレクションをうけねばならないはめになりました。

セレクションでは、両大学とも順調に進み、全国各地から集まって来た百名近くのプレイヤーの中から、選ばれた十人の中に

入ることが出来ました。

それはそれとして、私自身は、いまだ二

者抜一のいすれにつこうかと思ひ悩んでいたのもかゝわらず、時の流れは、私をバスケット・ボールへ、バスケット・ボールへと推し流していたのです。

（これは天が、私をバスケット・ボールの道へ進ませようとしているのだろうか？）
（それとも、ひたすら僧道に生きねばなら

ない私に対し、こうして次々に試練を与えているのであろうか？）
（へ或は、こういう勧誘自体が、実は魔のいさないのであるのだろうか？）

（悩み苦しんでいた私は、

（自分と同じような悩みをもつてゐる人はいないだらうか。若し居れば、一緒に語りあり、そして一緒に考えあつてみたい）

（と思いました）

この時です。曾って父が語ってくれた伝教大師の話を、フト思い起しました。そ

れは伝教大師が、まだ最澄と呼ばれていた十九才の頃、奈良八宗の仏教の墮落に憤激して比叡山にこもり、大誓願の修行を始めた時の願文のことです。

さすが私は、父の書棚の中から、伝教

ありました。

願文は難解な文章でした。

へ然し、ここに同じ悩みをもつた者の叫びがある。

と思うと、字句は解らないながらも、何度も何度も眼を皿にして読み返しました。

その中、何とも知れない大いなる感動がこみ上げて来て、思わず善物を涙でぬらしてしまったほどでした。

ちなみに伝教大師の願文は、次の通りです。

まだ照さず、三災の危きに近ずき、五濁の深きにしづむ。
しかのみならず風命たち難く、露体きえやすし。草堂薬しみなしといえども、しかも老少白骨を散じさらす。土室くらくせましといえども、しかも貴賤魂魄を争い宿す。

彼をみ、おのれをかえりみるに、この理必定せり。仙丸いまだ服せず、遊魂留め難く、命通いまだ得ず、死辰いつとか定めん生ける時、善をなさんば、死する日、歎の薪とならん。得難くして移り易きは、それ人身なり。発し難くして忘れ易きは、これ善心なり。

愁々たる三界は、もっぱら苦にして安きことなく、擾々（じよぐく）たる四生はたゞ患（うれい）にして楽しからず。

牟尼の日、久しくかくれ、慈尊の月、い

こゝをもつて法皇牟尼は、大海の針、妙高の糸をかりて、人身の得難きをたとえ古賢愚王は、一寸の陰（ときし）、半寸の

ひとを惜みて、一生の空しく過ぐることをなげり。

因なくして果を得るは、このことわりあることなく、善なくして苦をまぬがるゝはこのことわりあることなし。

伏して、おのが行述を尋ね思うに、無戒にして、ひそかに四事のいたわりをうけ、愚痴にして、また四生の怨（あだ）となれり。

この故に、未曾有因縁経に云わく「施す者は天に生れ、受くる者は獄に入る」と。提婆女人の四事の供は、マリ夫人の福とあらわれ、貧著利養の五衆の果は、石女タンヨの罪とあらわる。

明かなるかな善惡の因果、誰か有慧の人この典を信ぜざらんや。然れば則ち昔因を知りて、苦果を畏れざるを、紹尊は闡提と

達したまい、人身を得て、徒らに善業をなさざるを、聖教に空手をせめたり。

ここにおいて愚が中の極意、狂が中の極狂、塵^{アヒ}有情底下的最澄、上は諸仏にたがい、中は皇法にそむき、下は孝礼にかけ、謹んで迷狂の心に隨い、三・二の願をおこす。無所得をもつて方便となし、無上第一義のために、金剛不變不退の心願をおこす。

我れ未だ六根相似の位を得ざるよりこのかた出せじ。（その一）

未だ理を照らすの心得ざるようこのかた、才芸あらじ。（その二）

未だ淨戒を具足することを得ざるよりこのかた、相主の法会にあずからじ。（その

三）

未だ般若の心を得ざるよりこのかた、世間人事の縁務に著せじ。相似の位を除く。

三際の中間に修するところの功德は、独りおのが身にうりす。あまねく有識に回施して、悉く皆無上菩提を得せしめん。(その五)

伏して願くは、解脱の味は、ひとり飲まず、安樂の果は、ひとり証せず。法界の衆生と同じく妙覺に登り、法界の衆生と同じく妙味を服せん。

若し、この願力によりて、六根相似の位に至り、若し、五神通を得ん時は、必ず自度を取らず、正位を証せず、一切に著せざらん。

願くは必ず今生、無作無縁の四弘誓願に引導せられて、あまねく法界にめぐらしくあまねく六道に入り、仏國土をきよめ、衆生を成就し、未来際を尽すまで、つねに仏

この伝教の願文の中、最も強く、そして最も深く、私の心に焼きついたのは、五つの誓願の中の「その二」、「

「未だ理を照らすの心を得ざるよりどのかた、才芸あらじ」

とくらうことでした。

伝教は、

「理性、真理を照すほどの仏知見を得ない中は、一切の才芸はやらない」

とくらうのです。何と厳しい言葉でしよう。十九才の青年伝教は、すべての才芸をもかえりみられないほど真剣に、仏道を求めていたのです。

それにもかかれば、私の求道なんぞは、

何と幼稚な、何と怠慢なものであったのでしょう。

如何にも私は、もの心もつかない頃から厳しく祖母や父にしつけられて來ました。おかげでお經も読めるようになり、仏事作法も出来るようになつてはいました。

然し、今にして思えば、その殆どのものが、他律的な形式にすぎなかつたのです。そこには燃え沸るような厳しい自発的求道の志は、大いに欠けていました。

このためバスケット・ボールに心を奪われ、遂には、
バスケット・ボールで名をあげ、身も立てよう。

といふような志望をいだいては、僧道との二着抜一の道に迷ひ悩んでいたのです。

私が考えていた僧道とは、仏知見と直接

関係もない形式的なものにすぎなかつたのです。

仏教は、その顯文にも述べている通り、三世にわたる悠久なる人間の生命を観察し未だ仏知見の道に程遠い自分みずからを反省しては

「愚が口の極愚、狂が中の極狂、塵充滿有情底下的最澄、上は諸仏にたがい、中は皇法にそむき、下は孝礼にかけ。・・・」

とまで懺悔しています。

それにしても私は、どれほど自分みずからの人間性をみつめ、反省し、懺悔していくでしよう。

私は恥しくてたまらませんでした。と同時に、

バスケット・ボールに熱中するほどの自発的な意欲をもつて、自己をみつめ、人間

を探求し、そしてその解決を仏道に求むべきであった。」

と、忠い知られたのです。

最早、バスケット・ボールの道に生きようとする志望の心は、轟の暗れるように消えていました。そして僧道ひとすじに、厳しく生き抜かんとする斗志のみが、全身にみなぎっていました。

16

然し、その後、バスケット・ボールとアツツリ縁を切ったわけではありません。クラブのレギュラーとして責任もあり、おもてむきは今まで通り、練習に励んでいました。

ところが凡夫のはかなさ、練習しておれば、バスケット・ボールに生きようとした

頃の未練が湧いて来るのを、どうすることも出来ませんでした。特に芝浦工業大学・関西学院大学そして関西大学を見逃してしまったことが、あたかも釣り落した大魚のように思われてなりませんでした。

そのたびごとに、「我れ未だ理を照らすの心得ざるよりこのかた、才芸あらじ」と、我れと我が身に言い聞かせてはいましたが、それすら、ともすれば他律的に流れてしまい、内より爆発するような自主的意欲に欠げているのを否定することは出来難い有様でした。

こうして、この年もすぎ、翌年昭和三十一七年の二月十六日、高校卒業を目前にひかえた宗祖御降誕の御聖日の夜、既に本稿巻頭に述べた通り、父から十王讀歎鈔の中の

されたことによつて、それまで永い間とりつかれていた悪夢を完全に払拭し、心から

出家の道にふみ切ることが出来たのです。

今や私の進む仏道は、それまで考えていたような後むきのものでなく、バスケットボールの道をはるかにしのぐ、厳しい前むきの道でした。

「我れ未だ淨戒を具足することを得ざる上

りこのかた、檀主の法会にあづからじ」

「功德は独りおのが身にうけず、あまねく有識に回施して、悉くみな無上菩提を得せしめん」

という伝教の願文が、ひしひしと身に迫り、広宣流布のため身をすてて行く喜びが沸騰しました。

日蓮宗の大学は、立正大学と身延山大学と一つありました。まず勉学と共に僧道

実習を身につけるため、身延山大学を選びました。

入試にも無事合格し、父と伯父とともにわれ、大阪駅頭、多くの檀信徒に見送られながら身延へ向いました。

身延山では、まず祖廟に参拝しましたが祖廟の靈氣にふれた時、曾って無い大いなる感動に身ぶるいするほどでした。

△これから大聖人のお膝元で、行学の二道を勵み、本仏釈尊にも大聖人にも、そして父母にも先祖にも、少しでも多く孝養の誠をつむことが出来る。その功德は十方無邊の人々にほどこそう

と書わずにあられませんでした。

幸い、在院生として本山居住が許されました。然し、大学一年の間は、本山生活に慣れない上、新入生として課せられた仕事

も多く、そのため本山の朝夕の勤経のほか、学生有志の唱題修行に参加するくらいで、最初はち切れほど期待していた修行練磨の道は、どこにも見出すことは出来ませんでした。

へ果して、こんなことでよいのだろうか。

高校時代の放課後、三時間も四時間も、ぶつ通しでバスケット・ボールの練習に、心魂を打ち込んでいたほどのこともないのだ

が・・・。/
とうう疑惑も起らないではありませんでした。

街頭布教を開催するに当たり、私もこれに参加する機会を得ました。

これは身延山鷲峰会が主体となっているもので、昭和三十七年の夏休み以来、冬休みを経て、今度で三回目の布教でした。

信州は凍りつくような大雪におおわれていました。学生布教隊は雪を蹴り、吹雪をついて警笛宣令し、またマイクを通して立正安國を獅子吼しました。

それは、初めて接することの出来た鷲峰会僧道の厳しさと尊さでした。バスケットボールの練習など足もとに及ばぬものでした。

七

翌月の四月二十八日、立教開宗の聖日をやがて入学以来一年が過ぎ去ろうとする昭和三十八年の三月八日より四日間、春休みを利用した学生有志が、信州松本地方に

「私は久遠実成の本師釈迦牟尼仏に帰依し奉り、本仏の法華經に帰依し奉り、身延山鷲峰会の僧侶に帰依し奉りて、行学の二道

任懸を、これほど強く固めさせたものはありませんでした。

を勵み、仏祖の願業達成に、身命を惜まさることを誓願し奉ります」

この時の感激は、今でも忘ることは出来ません。それからの本山生活は意義あるものでした。次の夏休みには、豊橋から姫路まで、関西方面十日間の行脚布教に参加し、参加するごとに感激はつのり、僧侶たる者の眞の道を、こゝに見出した思いがしました。

特に、この年の秋十月二十六日より翌年の二月七日まで寒中一百日間、鷲峰会の同志学生と共に、祖廟の身延川に、胸までつかって言語に絶する唱題水行したことにより、立正安國の大理想に対する使命感と責

18

バスケット・ボールでは、ボールと自分が一体となり、ボールが自分の体の一部となる時、最高のプレイが出来るといわれていますが、法華經の信仰では、法華經そのものに我が身をまかせ切る時、法華經の側から、人智も及ばぬ広大無辺なる法華經の眞実が、そのまま具現されるといわれています。

たとえは孝養にしても、三世の実相すら知らないでいる自分自身の、浅はかな考えで尽すよりも、三世の実相を達観された久遠の本仏釈尊の大慈悲心にまかせて、法華

経の側から尽す孝養の方が、より広大であり、より眞実であることは言うまでもあります。

「上は諸仏にたがい、中は皇法にそむき、下は孝札にかけ……」

こゝに法華經に身を捧げ、まかせ切る、ということが最も肝心なことになって来ます。これには常に、

△果して法華經に捧げ尽し、まかせ切って

いるか、どうか)

という反省と懺悔がともないます。大聖人は弘安三年三月八日の「上野殿御返事」の中に、「孝養と申すは、先ず不幸を知りて、孝と知るべし」と仰せられていました。

△これでよし

と思うほど、慢心も甚しい自分自身の、勝手な計らいにすぎません。伝教の願文の

法華經に生き抜くことは、報恩感謝に生き抜くことであり、孝道に生き抜くことです。私は今後とも、懺悔に懺悔を重ね、法華經を本として、三宝に対する報恩の道

父母・師匠に対する孝養の道に、心をつくし、身を捧げて行きたいと思ひます。

この決意は、たゆみなく歩きつづけて行く鷲峰会僧伽の、同志の厳しい修行と共に、退転することはないでしょう。

それにつけても書つて私が、バスケット

ホールに心を奪われていた頃、心の中ではオロオロしながらも、時の来るまで、じつと私をみつめてくれていた父母のことです。その父母の心を忘い返すと、私は祈るよう叫びたくなります。

「お父さん、お母さん、こんな迂闊な私のような者を、長い間お叱りもせず、何時も慈愛のまなこで見護って下さいました御恩は、生涯、決して忘れはいたしません。

今まで御心配をおかけした不孝は、今後私が立派な本化の沙門となることによつてお返し致したいと思ひます。

そして尽し切れない御恩のほどは、一人でも多くの人々に、法華經の信仰をお伝えすることによって、代えさせて頂き度いと思ひます。

どうかお父さん、お母さん、その日の来るまで、何時までも丈夫でいて下さい。

教義説明

福いは口より出てて身を破る
幸いは心より出てて身を飾る

これは日蓮聖人が富士山麓の重須（おもす今の北山本門寺のある所）の一婦人へ与えられた十字御書（むしもちごしよ）の一節です。

とかく福いといふものは、自己本位な、あさはかな打算的言葉によつて起り、そして遂には身を破滅させてしまうものです。

これに反して、祝福される栄光、幸いといふものは、自分を勘定に入れず、人々に対する深い思いやりの心をもつことによつて、何時しか必ず与えられるものです。人々から祝福されるよりも、神仏より祝福されようとすると、そこに純粹な信仰があると申せましよう。不滅の栄光に生きる私たちはあります。

読者の声

奈良県 乾 九二男

毎月鷲峰を拝讀するたびに、私自身、仰る記事がドンドン掲載されますよう、そして鷲峰会が、より一層發展いたしますよう、強盛に信仰を勵むべく發奮させられ、心から感謝しています。

その一

清澄山別当 堀 龍淳

謹啓

身延山の基督教活動は、前々から感謝感激して居る處ですが、特に鷲峰六月号所載、沢田、小寺両君の、熊本から身延への唱題行脚紀行文は、終始、位きながら一氣に読了いたしました。

ここに鷲峰同人諸君の健在を御祈り申上げ、詰料毫千円を同封いたしました。

その三

久留米市 井上ヨシノ

日増しに暑さを加える今日この頃、鷲峰会学生の皆さんにはお変りございませんか。去る五月、九州団体の身延参拝の折は、七面山までも一方ならぬ御世話になり、何とお礼の申しようもございません。

その折、鷲峰会の月刊雑誌のことを始め

その二

その折、鷲峰会の月刊雑誌のことを始め

て知り、さっそく申込ませて頂きましたが、昨日、六月号を拝受いたしました。

皆さまの崇高な理想と、たゆまざる実践によりにじみ出た、まごろのこもった、あの本、鷲峰、日蓮宗にも、このように立派な月刊雑誌が出来るようになつたかと思うと、心から嬉しくなりません。

ひとえに鷲峰会学生の皆々様の御努力と異体同心のたまものと、深く感謝している次第でございます。

さっそくですが、私も贊助会員の一人に加えさせて頂きますと共に、別紙の通り、数名の読者を御紹介いたしますので、六月号からお送り下さいますよう、お願ひ申上げます。

こんなに良い雑誌ならば、私一人でなく出来る限り多くの方に読んで頂きたい、と思う心で一杯でございます。

御信者の方々に、鷲峰をおすすめするこ

との出来る嬉しさ、私のような者でも、鷲峰をおすゝめすることによつて広宣流布のお手伝が、いくらかでも出来るうれしさで心が躍るようでございます。

鷲峰会と鷲峰の御発展を、切に切にお祈致します。学生の皆々様も暑さきびしき折から、御法体おいとい下さいますように

そ の 四

大阪市

宮本 龍一

先祖代々熱烈な法華經信仰のお方を二人しかも前途有為な青年を御紹介いたします
早速そちらへ直接、鷲峰を送って下さい。

これから宗門は、青年の力と團結によるほかはありません。鷲峰も号を重ねるにつれて、一人でも多く宗門青年の読者が増えますよう、期待し、お祈り致しますと共に、私たちもまた、そのように努力させて

頂きます。

そ の 五

お願ひ

「読者の声」をおよせ下さい。

私は、近く甲府の県民会館で上演される「神と人の対決」という脚本を執筆中ですが、鷲峰に連載されました「デクノボウの祈り」を読んで深く感動し、是非とも宮

本誌読後所感、御意見、御希望などをお知らせ下さい。されば、本誌発行に懸命となっている私共学生にとって大きな力となります。

い、と念願しております。

それは宮沢賢治の生涯を通して、眞実の法華経信仰を一般大衆に知らしめたいばかりであります。

一 「信仰相談室」へ御質問をおよせ下さい。共に考え、本誌上でお答えいたします。

一 一層の御認力、御支援をお願い申上げます。

鷲峰編集部

脚色、演出は私の方でいたしますので、賢治の信仰を、鷲峰会で御執筆下さるれば誠に幸いに存じます。よろしくお願ひ申上げます。

暑中御見舞申上げます

昭和 39 年盛夏

身延山布教部

布教部長

岩間湛良

暑中御見舞申上げます

酷暑の折柄皆様の

御健康をお祈り申し上げます。

昭和 39 年盛夏



株式会社 岡本組
取締役会長 岡本宗治
取締役社長 青柳不折

本店 大阪市西成区玉出本通4丁目1

◆ 電話大阪(651)7775(代表)

支店 東京都中央区日本橋小舟町2丁目7

◆ 電話東京(661)2050・2318・2366

営業所 名古屋・尼崎

暑中御見舞申上げます

日蓮門下總決起の時、皆様
の御健勝と御精進切にお祈
り申上げます。

大阪日蓮門下連合団々長

南 日 常

大阪市天王寺区勝山通 4-52

日蓮門下連合団事務所 (771) 2973

自坊

大阪府八尾市服部川一ノ谷

安国寺 (0729)(4)(8201)

暑中御見舞申上げます

世界広布を確信し仏陀を
たゞ人々を敬い「夏ノ
暑サニモマケズ」に一日
一日の最善を尽しましょ
う。御健勝をお祈り致し
ます。

三 德

堀 内 貞 良

東京都新宿区新大久保 3-1

(351) 8101-5

暑中御見舞申上げます

法華經の宣布は、菩薩行にともなう思想の対決です。
身延山鷲峰会の發展と読者皆様の行學二道にわたる
一層の御精進を酷暑の間、切にお祈り申上げます。

昭和三十九年盛夏

大乗物童 猪瀬秀成

横浜市井土ヶ谷中町一六一

暑中御見舞申上げます

酷暑の折から皆様の御
健康をお祈り致します。

昭和 39 年盛夏

東洋印刷社

藤 原 秀 憲

大阪市旭区中宮町 4-132

(952) 1802

暑中御見舞申上げます

昭和 39 年盛夏

大阪市阿倍野区文之里 3 丁目

明淨学院女子高等学校

赤 阪 日 孝

暑中御見舞申上げます

日頃の御愛顧を感謝し、あわせて
皆様の御健勝と御隆昌をお祈り申
し上げます。

昭和三十九年盛夏

身延山鷲峰会

日 高
第一期卒業生白
在 校 生
一
同 生 像

編集後記

☆本誌七月号の発行がすっかり遅れてしまつて申訳ありません。読者皆様からは毎日のように督促をうけ汗顏の至りでした。

☆実は日高編集長が七月二十二日より八月十一日に至る二十二日間の、北陸三県、関西（大阪、高槻、阪南、堺、和歌山、高野山）つゞいて北九州から久留米にまでも及ぶ長期間の夏期布教準備と、八月二十六日より二十九日に至る身延山青年行学講習会の準備に忙殺され、七月号も街頭布教中に編集するというようを有様でした。

☆八月号は出来るだけ早く発行するよう努めし、特に原爆被災の月にちなんで平和問題をとりあげたいと思つています。

☆猛暑の折から皆様の御健勝をお祈り致します。

鷲峰七月号

昭和三十九年

第二卷 第七号
通巻 第十三号

定価 五十円

昭和三十九年六月二十日

印

昭和三十九年七月一日

発

行

編集兼发行人

日高白象

印刷所

甲府市東橋町

天野磨写堂

発行所

山梨県身延町身延山久遠寺内

身延山鷲峰会

電話（身延山）

二番・三番

振替（甲府）

二〇九三番

誌代 半年分

三〇〇円

（半共）

一年分

六〇〇円

（）

鷲峰贊助会費

一年

三〇〇〇円（分納可）